序
一鍼は世界と通底する

筑波技術大学名誉教授、社会鍼灸学研究会代表
形井秀一

鍼灸臨床に社会学的な視点が必要であると言われても、ぴんとこない向きも多かろう。

しかし、鍼灸は、市井で日々生活を営む人々が、疲弊した心身を運んでくる治療院で行われているので、市井の人々の生活の上に、あるいは生活の中に、鍼灸治療が存在していること、あるいは存在するべきであることは、鍼灸臨床家であれば、当然分かっているであろう。

また別の例で言うと、1970年代から鍼灸治療を行っていた臨床家であれば、70年代初頭の鍼麻酔報道による世界的な鍼灸ブームで患者が増え、80年代の世界的なエイズの問題で患者が減り、2000年代には、「福岡裁判」後、鍼灸専門学校数と大学数が増加し、現在では当時の 4 倍になったこと。さらに介護保険ができるなど、鍼灸が高齢社会に対応する手段として注目を浴びる可能性が期待されたが、2010年代になると、東洋医学分野において中医学を世界に普及させようとする中国の世界戦略が見えてきて、どう対応するか戸惑いを禁じ得ない、・・・・・、と、日本の社会情勢のみならず、世界の動向と日本鍼灸は切っても切り離せないと、体感していることであろう。

このことは、現今の日本経済が世界経済の動向に大きく左右され、米国や中国、中近東、東南アジア、ユーロ圏等々、世界中の国々の経済状況を無視できないということを考えなければならない時代であることと同じ意味である。

これは、中国、李氏朝鮮、オランダの 3 カ国とのみ貿易を行っていた江戸時代であっても、実は同様であったというと、小首をかしげる人が多いかも知れない。わずか3カ国との貿易であったが、その3カ国の背後には、それら3カ国と交流する多くの国々があり、関係があったはずである。江戸時代の大半の期間はまだ、その3カ国との交易で済む規模の（日本から見た）世界経済であったという事も出来るであろうが、江戸末期になると、米国、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと修好通商条約等を結び、外交官らが日本に滞在した。19 世紀の初旬には、もはや、日本は世界経済のルツボの中に入ることを断り切れない状況になっていたとも言えよう。

そして江戸時代、医学分野で言えば、オランダ経由で日本に伝えられたヨーロッパの医療を日本の漢方医達が受け入れ、学び、臨床に活かそうと努力した。そのことは、江戸の医師達も世界を視野に入れていたことを意味しよう。その上、その江戸の西洋医学の受容の有り様は、明治維新以降、日本の医学界が西洋医学を受け入れることができる素地を江戸時代に十分に育てていたとも言えるであろう。

このような視点は、現代の鍼灸の状況を考える上でも大事である。特に、ISO、ICD、ICHIなどで、国際的な標準を策定しようとする動きを見ると、そのような思いをさらに強くする。国内においても、あはき療養費が改変されることになったことや新カリキュラムが公布され、実施されてきていること、あん摩マッサージ指圧師養成課程の増新設を承認することを求める裁判が行われていることなどを考えると、国内外の情勢の変化に日本鍼灸界がどの様に対応するか、現在の鍼灸界が考えなければならない重要な問題である。

以上のように、日本鍼灸が社会情勢と密接な関係にあり、社会情勢が鍼灸の存在に直接的に関係することが、理解頂けよう。社会学的視点は、鍼灸の技術や臨床効果に直接的には関わらないとも言えるが、間接的には大いに関わる問題である。

「穴(ツボ)から世界が見える」という意識を忘れたくない。臨床は世界と直結しているのである。一鍼は世界と通底しているのである。鍼灸を社会学的に議論することが求められる。